

《特集 国際シンポジウム「北東アジアにおけるトランスナショナル・コミュニティとアイデンティティ化」》

東アジアにおけるトランスナショナル・ コミュニティの歴史と現状

貴 志 俊 彦

はじめに

1. 移動する者たちに対する“まなざし”
2. 国際シンポジウム「北東アジアにおけるトランスナショナル・コミュニティとアイデンティティ化」の開催
3. 19世紀から現代に至るまでの東アジア圏内の移動の諸相
おわりに～今後の課題～

はじめに

現代は、これまでにない移民の時代といわれている。ただ、移民化現象が顕著になる19世紀から現在にいたるまでの社会状況を通時的に明らかにしたものは、それほど多くはない。また、こうした移動する者たちを対象に考察すれば、従来の研究の枠組みにおいて何が明らかにできるのかについての検証も始まったばかりである。

まずは、わが国の状況について触れておきたい。戦前、外務省通商局は、海外の領事からの報告で『通商公報』を編纂し、とくに中南米への移民向けに『移民地事情』（1922年～1931年）、『移民情報』（1929年～1931年）、『移民地事情』（1927年～1933年）、『海外』（1927年～1933年）を刊行していた。外務省は、こうした海外への日本人移民事業に取り組んではいたものの、省内に移住局が設置されたのは戦後の1954年7月20日の閣議決定によってである。外務省はさらに、移住を促すために、1963年に外郭団体として「海外移住事業団」を設置した（のち国際協力事業団）。この事業団も、1967年から業務資料として『移住研究』を創刊し、1996年までに33号を刊行した。こうした資料情報が語ることは、外務省が「移民」「移住」という用語を使用する場合、その意味するところは日本人が海外に移住する事象を指しているということである。

しかし、1985年以降、日本の総人口がめだつた変化を見せないのに対して、日本国内における外国人登録者数が増加し、とりわけ2000年以降不況にあえぐ日本社会とは矛盾するかのようその数は急増する¹。うち、韓国・朝鮮人は、特別永住者数が1991年末をピーク

に毎年減少を続けているのに対して、国交回復後から増加する中国人はこの数年間で急増しており、またブラジル人、ペルー人、フィリピン人も増加の時期は異なりながらも、平成に入ってから増加している。よく言われるように、近年の外国人の増加の中心はこうしたニューカマーと呼ばれる労働目的の人々で、一時的に日本に滞在しているにすぎない。また、外国人問題のもう一つの問題は、日本に永住申請を行う外国人が増えていることであり、法や行政の面で彼らに対する制度的改善が求められている。とくに、彼らに地方参政権を認めるかどうかで議論が白熱している。

ところが、日本の外国人対策は、現在のところ法執行的な意味での「出入国管理及び難民認定法」、そして在留資格の規定などがあるだけで、移民法や移民政策というものは存在しない。それは、「日本は外国から移民を受け入れないためであり、外国人を入国の段階で永住者として在留許可することはない。原則として永住権の付与は、外国人が一時的滞在者として一定期間滞在し、条件に適合する場合のみ限定的に行われる」²という指摘のとおりである。グローバリズムが影響を及ぼすなかで、日本でも急増する外国人に対応する法的あるいは行政上の措置を考慮すべき現実問題に直面しているのは事実である。

近年、日本でトランスナショナル・コミュニティ研究の必要性が強調されるのは、こうした外国人の現状を考え、改善する必要があると認識されつつあることが背景にある。筆者のような歴史学者が、移動する者たちへの関心を高めるのは、こうした日本が直面する社会変化に対する認識レベルの問題にすぎないが、それでも近年の人種や国境を超えた世界の形成が、異なる国、都市、コミュニティ同士の、ある種の自由なつながりとして捉えるきわめて楽観的な評価については懐疑的にならざるを得ない。

2004年11月6日、われわれ科研プロジェクト・メンバーが明治大学で国際シンポジウム「北東アジアにおけるトランスナショナル・コミュニティとアイデンティティ化」を開催したのは、以上のような問題について、移住する者たちのアイデンティティのあり方とともに検証するためだった³。

1. 移動する者たちに対する“まなざし”

1980年代ポストモダン論の流行とともに、これまで使われていた移民や移動者という言葉に加え、ディアスポラ＝離散者や、エグザイル＝亡命者という用語が脚光をあびるようになった。さらに、1990年代以降は、グローバリズム、エスニシティと移動する者たちとの関係を論じる必要性が唱えられている。さらに今日では、これら移動する者たちを包括的に論じるためには、学問的に価値判断をなくすトランスナショナル・コミュニティという用語が必要ではないか、との問題提起がなされている。これは、カレン・カプラン、村山淳彦『移動の時代——旅からディアスポラへ——』（未来社、2003年）などにでも言及されているように、古典的なシカゴ学派のように移民を国家や支配的な文化への「同化」と「排斥」という2つのベクトルの間の段階性を論じるアプローチを克服する試みとして評

価されてよい。

こうした移民に対する価値超越的な評価は、1980年代以来のディアスポラやエグザイルに関する一連の研究を通じて、コミュニティが単純に被抑圧的な犠牲者集団でなく、またサクセス・ストーリーに満ち溢れた過度に能動的なグループでもなく、彼らの実像に迫ることを現実的に可能にさせた。いずれにせよ、国民国家形成からはじきとばされた異端者としての評価ではなく、異国の地で根を張っている／はろうとしている生活者としての境遇を通じて考察を進めるべきであると考えられるようになっていく⁴。その結果、移動する者と定着している者との桎梏のなかでの地域変容、さらにその変化に対応しようとする政府の政策転換を捉える視点が必要であることが提起できる⁵。国境を越えたコミュニティを形成する者に対しては、母国とのネットワークを重視するあまり、滞在あるいは定住するホスト社会の制度や規範に規制される側面をもった存在だということを看過してはなるまい。

とはいえ、この種のコミュニティが国境を超えて拡散した場合でも、すぐさま「国境を超えた公的な領域 (transnational public sphere)」が作られるわけではなく、またホスト国のナショナリズムに同一化されるとも限らない。ロビン・コーエン、駒井洋『グローバル・ディアスポラ』(明石書店、2001年)でも言及されているように、トランスナショナル・コミュニティをめぐるアイデンティティの様相は、じつに複雑であり、可変的、あるいは選択的なのである。

さて、ディアスポラやエグザイルなどに対する評価の転換は、周知のとおり、エドワード・サイードに始まる。サイードが「エグザイル」をとりあげた際に、きわめて示唆的な言い方で次のように表現している。つまり、彼らは、生まれ故郷から完全に切り離された存在ではないものの、いつでも戻れる事情にもない。こうした不安定な立場を踏まえながら、自らのナショナルなアイデンティティを意識するよりは、むしろ状況に適合するように自ら変容させていく、相対的なメンタリティをつねにもっていたというのである⁶。

こうした指摘は、その後、カルチュラル・スタディーズの側からスチュアート・ホール、レイモンド・ウィリアムスの研究が著されたし、最近ではポストコロニアルの立場からホミ・バーバ、ポール・ギルロイ、ガヤトリ・スピヴァック、周蕾、陳天璽らの研究が生まれた。一部では、こうした研究潮流を「ディアスポラ・パラダイム」と評価し、「ディアスポラ学 (Diasporology)」と称するむきもある。しかし、移動する者たちを一括して「ディアスポラ」と断定するのでは、彼らが無目的な漂流者であるとのニュアンスをもたらずし、また彼らへの視点だけに偏り、どこに移動して、どういう環境に取り巻かれるかという「場」への問題意識が欠落する⁷。そうした点で、在日コリアンや沖縄の人を、こうしたカテゴリーに入れる研究は一考の余地がある⁸。

2. 国際シンポジウム「北東アジアにおけるトランスナショナル・コミュニティとアイデンティティ化」の開催

以上のことからわかるとおり、移動する者たちの選択的なアイデンティティのあり方を事例を通じて検証することの意義は、現代でも問われている。冒頭で述べた国際シンポジウム「北東アジアにおけるトランスナショナル・コミュニティとアイデンティティ化」は、ディシプリンを超えて、こうした事例を検討することを目的としたのである。当日のシンポジウムの構成は、以下のとおり。

総合司会・シンポ趣旨説明：貴志俊彦（島根県立大学）

「北東アジアにおけるトランスナショナル・コミュニティをめぐる歴史と現状」

第1部 戦前の移民コミュニティをめぐる実相

①潘光（上海社会科学院欧亚研究所）

「中国のユダヤ人移民三大グループの国籍と法律問題」

②オスマノヴァ・ラリサ（島根県立大学大学院 DC）

「20世紀前半の東アジアにおけるトルコ・タタールの移民コミュニティ」

コメンテーター：寺内威太郎（明治大学）

第2部 戦後の移民コミュニティをめぐる実相

③陳祖恩（上海社会科学院歴史研究所）

「上海日本人居留民戦後移送政策の実情」

④李愛俐娥（京都外国語大学）

「沿海州における多文化・多国籍コリアンの現状」

コメンテーター：孫安石（神奈川大学）

総合討論

このシンポジウムのテーマに、「アイデンティティ化」というように「化」をつけた意図は、アイデンティティを固有かつ普遍的な存在として、アイデンティティ・クライシスといった脈絡で捉えるのではなく、むしろそれをうつろいやすく、状況選択的であるという点に留意する必要があると考えたからである。「アイデンティティ化」の過程においては、エスニシティ形成の特徴が強く主張されることもあるし、また宗教的共同体が意識されることもある。しかも、よく言われるように、そうした所在する「場」と故郷とを民族や宗教、あるいは言語をも媒介としてつながれるネットワークは、必ずしも「場」と遮断されたものではない。

シンポジウムの冒頭でも述べたが、これまでの研究動向をふまえて、トランスローカルなネットワークの結節点となる地域の歴史と、これに連動して形成されたコミュニティに

刻み込まれた生活様式と、それをとりまく社会制度や法執行の実態を描くことが重要であると考えている。強調すべきは、トランスナショナル・コミュニティが、ただ漂流したり、移動したりするだけの存在ではなく、「場」に根ざした独自の生活様式をもつ集合体であるがゆえに、受け入れ側の地域や国家からも影響される小世界であるという点である。これは当然ではありながら、これまで欠落しがちな視点だった。

したがって、トランスナショナル・コミュニティについて論じる場合、「脱領土化」された文化がいかに別の共同体へと「再領土化」されていくか、まさにアルフレッド・シュッツが『現象学的社会学への応用』で述べた日常生活、すなわち異国の地でのローカルな生活世界に注目する必要がある⁹。こうした論点が、今日のトランスナショナル・コミュニティ研究の問題提起の一つだといえよう。

トランスナショナル・コミュニティは、かつては特に文化人類学や社会学でローカルな問題としてとりあげる傾向にあったが、近年ではグローバリズムの影響のなかで、所在地と出身地とを結ぶエスニック・ネットワークが強く意識されている。日本の状況を明らかにしたのが、広田康生『エスニシティと都市（新版）』（有信堂高文社、2003年）や、伊豫谷登士翁『グローバリゼーションと移民』（有信堂高文社、2001年）であり、世界経済の変動を、こうした移民コミュニティの側から捉える必要性を唱えている。

さらに、今日では、コミュニティの趨勢を跡づける必要が再認識され、コミュニティをとりまく「場」そのものがもつ歴史的特徴とのかかわりが次第に意識されるようになってきた。これは、特定のエスニック・コミュニティが孤立的に存在するのではなく、「場」を構成する一部であるということが周知されたためである。こうした視点は、しかし異国の地にあるコミュニティに対し、国民国家というある種の幻影にさらされて、見逃されがちであった。彼らは、けっして根をもたないデラシネ（根無し草）ではない。さきのシンポジウムの開催も、こうした今日の研究のまなざしにもとづいて、過去から現代にいたるさまざまなコミュニティと、その制度的な環境についてとりあげ、マルチ・エスニックな世界の共存のあり方について考えてみたいと思ったからである。

3. 19世紀から現代に至るまでの東アジア圏内の移動の諸相

本節では、シンポジウムにおける各報告の背景となる歴史について、簡単に紐解いておきたい。

20世紀以降の東アジアは、近代的な世界システムに包摂されていながらも、独自の地域秩序を再編し、相互の文明を共有しているという幻想をもちながら、それぞれが融合しあわないという特徴をもつ世界構造を形づくっている。このことは、先だってわれわれが刊行した貴志俊彦・荒野泰典・小風秀雅編『「東アジア」の時代性』（溪水社、2005年）の「序」で言及したので、ここでは言及しない。

東アジアは、19世紀にウェスタン・イムパクトを受ける以前から、圏域外との交易ネッ

トワークを形成しており、その結果、多くの交易する者、労働力が行きかっていた。しかしながら、近世から近代に転換する過程における最も激的な変化は、それぞれの地域としてのまとまりに偏差がありながらも、ほぼ同じ時期に開国、そして近代国家形成の波が押し寄せたことであり、そのことがとりもなおさず人の移動を促すことになったのである。

とりわけ、19世紀末の日清戦争の勃発以降の時期は、域内の交通・通信システムが整備された時期と重なり、交易のみならず、観光や探検などが始まり、人の移動が加速化された¹⁰。さらに、辛亥革命を契機として大清帝国が崩壊し、日韓併合とともに大韓帝国が瓦解させられた。つづいて第一次世界大戦をへて、ロシア帝国、ドイツ帝国が崩壊すると、東アジア圏域内に残った唯一の帝国は日本のみとなり、こうした圏域内の地政学的な変化が、東西そして南北の移動をいっそう進めることになった。周知のごとく、ロシア革命の勃発を契機として一部のロシア帝国臣民の流浪の旅が始まったし、同時に日本人の大陸・半島への進出・侵略が政策化されるのも、この時期である。本誌に掲載されたオスマノヴァ・ラリサ「戦前の東アジアにおけるテュルク・タタール移民の歴史の変遷に関する覚書」は、こうした時期の東アジア地域に形成されたタタール人コミュニティと、かれらのアイデンティティの変容のアウトラインを時期をおって描いたものである。また、ご家庭の事情でシンポジウムに参加いただけなかった上海社会科学院の汪之成氏が書かれた『上海俄僑史』（上海三聯書店、1993年）や、李興耕『風雨浮萍－俄国僑民在中国（1917－1945）』（中央編訳出版、1997年）、石方等『哈爾濱俄僑史』（黒龍江人民出版社、2003年）などが、在華ロシア人の問題について深い考察を加えている。

むろん、戦前こうした人口移動を容易にした決定的要因は、パスポートやビザなどの入出国管理の制度が厳格でなく、比較的東アジア圏域内を自由に人が移動できたことによる。日中戦争の勃発以降1943年の海上封鎖が実施されるまで、大日本帝国から大陸への移動は容易だったのである。この移動の姿は、戦後の国民国家秩序による国際関係から考えると、まったく異質な世界であった。一方、この共栄圏から外へ向かうエネルギーに対してはきわめて制限されていた。移民研究会編による『戦争と日本人移民』（東洋書林、1997年）は、日本人移民に限るが、そうした移動する状況に偏差があったことを明らかにしている。

外からこの地域に流入する者として、代表的な存在は、ドイツ第三帝国から脱出した各国のユダヤ人であり、彼らは逃亡のゲートウェイを極東に求めた。じつは、東アジアに到来したユダヤ人は、ロシア革命や第三帝国の迫害だけを契機としたわけでない。かれらの背景が複雑でありながらも、ある種のカテゴリー化が可能であることは、本誌掲載の潘光「中国のユダヤ人移民三大グループの国籍と法律問題（1840－1945）」が取り上げている。潘光氏は、自著『猶太人在中国』（五洲伝播出版、2001年）、『上海猶太人』（社会科学文献出版、2002年）などで、在華ユダヤ人コミュニティを「香港上海のセファルディ系」、「北から南に発展したロシア系」、「ドイツ占領地区のユダヤ系」の3つのグループに分けて分析を続けている。今回の論文では、とりわけ彼らの法的地位を中心に検討を加えている。

さらに、第二次世界戦争によって、大日本帝国が崩壊すると、大陸や半島、島嶼部に移動していた多くの日本人、朝鮮人、台湾人、そして琉球人は、それまでの「日本人」という強制された国籍から分離、解放されて、連合国や中華民国の方針に準じて帰国の手続きを踏むことになった。もちろん、日本内地からの旧植民地人の帰還問題も重大な問題だった。こうした帰還者に関する問題が非常に複雑であったことは、松本邦彦『GHQ 日本占領史』第16巻（外国人の取り扱い）（日本図書センター、1996年）などを通じて検証できる。また、日本人帰還者についての実態も、河原功監修・編『台湾協会蔵 台湾引揚・留用記録』全10巻（ゆまに書房、1997～1998年）や、2000年にクレス出版から発行された一連の『引揚援護の記録』¹¹、加藤聖文編『海外引揚関係史料集成』国内編16巻、国外編・補遺編19巻（ゆまに書房、2002年）など検証できる。ただ、送り手であった中華民国国民政府などの移送政策については、これまで明らかにされてこなかった。本誌掲載の陳祖恩「上海日本人居留民戦後送還政策の実情」は、戦後直後の上海からの日本人帰還政策について論証した一文できわめて貴重である。本論文では湯恩伯を司令官とする国民政府第3方面軍は、蒋介石総統の「以德報恨」という指示にもとづき日本人帰還政策を勧めたが、中国のその他の地域の送還事業と比べても、上海は間違いなく「モデル」的役割を担っていたことを明らかにしている。

戦後の冷戦期、東西対立のなかで、東アジア圏域内における人の移動は、戦前と比べても極度に制限されたものになった。この緊張した時期、スターリンによってソ連内部の少なからぬ民族は、国家の政策によって移動を余儀なくされたことは周知のとおりである。シンポジウムで報告いただいた李愛俐娥氏は、『中央アジア少数民族社会の変貌—カザフスタンの朝鮮人を中心に』（昭和堂、2002年）で、こうした時期のカザフスタンの朝鮮人に対する実態的研究を刊行されたが、この問題はさらに検討を必要とする。

冷戦後は、東西対立の呪縛から解き放たれて域内、域外との人の移動は激しくなり、とりわけ1990年代グローバリズムの影響下において、民族移動、集団の移動はいっそう激しくなっている。こうした人の移動をみると、これまで語られてきた移動を促すプッシュ・プル要因だけで解明することはでないことが明らかである。シンポジウムで報告いただいた李愛俐娥「沿海州における多文化・多国籍コリアンの現状」は、現在の沿海州のコリアンの多様なコミュニティに関する実態調査の一端を紹介いただき、興味の尽きない話題を提供された。李氏は調査の進展とともに、論稿にまとめる予定である。

おわりに～今後の課題～

オックスフォード大学では、1997年から始まった「トランスナショナル・コミュニティ・プログラム」が2003年に終了した。この英国全域を包括するプログラムは、考察する問題が多岐に及ぶこと、世界各地には、トランスナショナル・コミュニティを研究する上でのアーカイブが豊富にあり、継続的な調査、利用が望まれることを世界に提言した¹²。

われわれが志す東アジアのトランスナショナル・コミュニティ研究は、こうしたイギリスの成果を踏まえながらも、まずはアジアから外へ、外からアジアへという2つのベクトルで移動する人たちの事例研究を積み重ねることが必要であることを確認しておきたい。もちろん、そのアプローチは、社会学、歴史学、法学など多様な問題から迫る必要があり、問題を多角的に、多層的に考察する必要がある。その際、方法の多様性を克服する方法が、国家間を移動しながらも、なお国家の規制を受けざるを得ない移動する者たちの日常の姿を直視することであろう。

【付記】

本特集「東アジアにおけるトランスナショナル・コミュニティとアイデンティティ化」は、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤 A プロジェクト「不平等条約体制下、東アジアにおける外国人の法的地位に関する事例研究」(代表: 貴志俊彦) による成果の一端である。本プロジェクトについては、<http://gsv.u-shimane.ac.jp/t-kishi/kaken/> を参照されたい。

注

- 1) 法務省入国管理局「外国人登録者数、日本の総人口の推移」(総務省統計局「平成16年10月1日現在推計人口」)(<http://www.moj.go.jp/PRESS/050617-1/050617-1.html>)。
- 2) 「オーストラリアの移民政策と不法入国者問題」(『外務省調査月報』No. 1、2003年)(http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/pr/pub/geppo/pdfs/03_1_1)。
- 3) 本誌特集号は、「北東アジア」ではなく「東アジア」に変更している。それは、当日の報告のうち、李愛娥嬢「沿海州における多文化・多国籍コリアンの現状」を掲載できなかったためである。
- 4) こうした観点からいうと、移民研究会編『日本の移民研究』(日外アソシエーツ、1997年)に対しては、現在の観点から再編する必要があるだろう。
- 5) このことは、筆者自身、各地の資料館で、沖縄移民や、中国にきたロシア人、そして東アジアをへてアメリカに渡った移民に関する調査をして、とくに感じることである。これら資料館所蔵の関連資料については、拙稿「スタンフォード大学フーヴァー研究所・中国関係アーカイブズ目録」(『メディアセンター年報』第2号、島根県立大学メディアセンター、2002年3月、清水賢一郎氏と共著)、同「オーストラリア国立図書館所蔵のアジア・コレクション」(島根県立大学メディアセンター報『界限』第11号、2003年6月)、同「ハワイ大学ハミルトン図書館北東アジア・ルーム所蔵の特殊コレクション」(同、第12号、2003年8月)を参照のこと。
- 6) 浜邦彦「『エグザイル』と『ディアスポラ』——英語圏カリブ海出身の知識人たち」(姜尚中編『思想読本 ポストコロニアリズム』、作品社、2001年)。
- 7) この点、上野俊哉「アフター・ザ・レッド・スカイ—旅する批評の二つのヴァージョンについて—」(『現代思想』vol. 23-03、青土社、1995年)が、ステロタイプ的な「文化多元主義」「ポストコロニアルの言説」「ハイブリッド美学」をはびこらせるとの指摘に共鳴する。
- 8) 例えば、例えば西成彦、原毅彦『複数の沖縄 ディアスポラから希望へ』(人文書院 2003年)。
- 9) この点は、駒井洋、石井由香『講座グローバル化する日本と移民問題』第4巻(明石書店、

2004年)でも、同様な論点が提示されている。

- 10) この一つの事例は、拙稿「日清戦争勃発前年の北東アジアの政治と社会——原田藤一郎『亜細亞大陸旅行日誌并清韓露三国評論』を通じて——」(『メディアセンター年報』第4号、鳥根県立大学メディアセンター、2004年3月)を参照にされたい。
- 11) 引揚援護庁『引揚援護の記録』、厚生省引揚援護局『引揚援護の記録』続、厚生省援護局『引揚援護の記録』続々(いずれもクレス出版、2002年)。
- 12) このホームページには、プログラムの成果としてワーキング・ペーパーやブリーフィングが掲載されている(<http://www.transcomm.ox.ac.uk/>)。

キーワード グローバリズム トランスナショナル・コミュニティ アイデンティティ
エスニシティ ディアスポラ

(KISHI Toshihiko)